2018 年（平成 30 年）
4月号（No. 875）
公益社団法人
日 本 山 岳 会
The Japanese Alpine Club
定価 1 部　150 円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

目　次

いびつな会員構成による大幅会員減を「オトモダチ作戦」で乗り切ろう‥ 1
安全登山推進についてのお願い‥ 4
地球の歴史に「千葉」の名前が――「チバニアン」誕生に向け熱気‥ 5
医療委員会主催「雪山の医療」講演会報告‥ 6
第2回山岳自然環境セミナー「山の自然が崩壊する　続・深刻化するシカの被害」を開催‥ 8
新燃岳噴火に伴う霧島連山の現状‥ 10
草津本白根山の警戒レベル引き下げ―立ち入り規制は半径1㎞に‥‥ 11
支部だより　石川支部‥‥‥‥ 12
図書紹介‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 12
新入会員‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 13
Climbing&Medicine・82‥‥‥ 14
会務報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 15
ルーム日誌‥‥‥‥‥‥‥‥ 16
会員異動‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 16
INFORMATION‥‥‥‥‥‥ 17
編集後記‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木‥‥‥‥‥‥‥‥10～20時
水・金‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥13～20時
第 2 、第 4 土曜日‥‥‥‥‥閉室
第1、第3、第 5 土曜日‥‥10～18時

いびつな会員構成による大幅会員減を「オトモダチ作戦」で乗り切ろう

ここ10年間、当会では会員増強を強力に進め、なんとか５０００人の大台を確保しているが、近い将来、団塊世代の後期高齢者化に伴い大幅な会員減が確実視されている。この状況を食い止めるだけでなく、当会の適正な運営規模である６０００人に近付けるため、全会員による「オトモダチ作戦」に協力をお願いしたい。

総務担当常務理事　永田弘太郎

落ち着いてきた在籍者減

ここ10年間の会員数の推移を**図1**に表わしました。会員数の減少が穏やかになってきたことが分かります。これは支部での入会の強化、ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢの活動、ホームページの拡充など、会を挙げて会員獲得に努めてきた結果です。

図2を見ると、退会者が横這いであるのに対し、入会者が増えることで会員減を抑えていることがよく分かります。

昨年から準会員制度も始まり、山小屋の割引が受けられるなど会員メリットも増え、これで入会者はさらに多くなって安泰、と思いたいのですが、実は今後数年にわたって大きな波が待ち受けていることが分かりました。

退会者が多い70歳代

退会者が最も多い年代は新しく入会してきた若い人たち？　実は最も退会者が多い年代は70歳台です。２０１６年度の退会者・物故者の約40％が70～79歳です（**図3**）。70歳台が80人、続いて80歳台が46人、60歳台が45人。２０１５年度も70歳台が突出していることが分かります。事務局に出された退会理由として、「山に行けなくなったから」というものが目立ち、家族

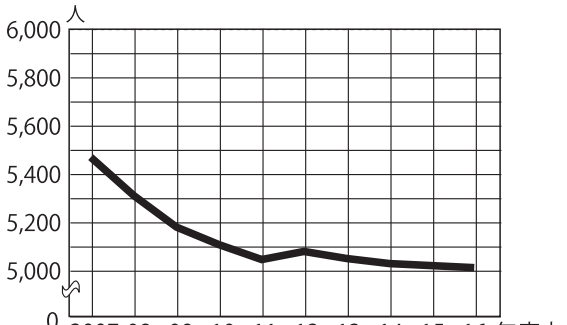


図１　会員数推移（含準会員）

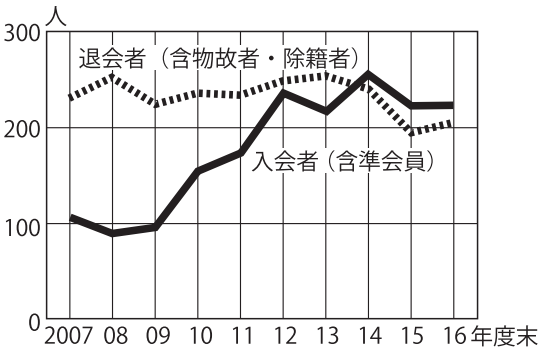


図２　入会者と退会者の推移

が退会を連絡してくることも多いといいます。

70歳台の退会者が突出している原因は、当会の在籍者で最も多いのが70歳台だからだという説があります（**図4**）。70歳台は1688人と全在籍者の33％、続いて60歳台1358人（27％）、80歳台784人（16％）となっています。

しかしよく見ると、単に在籍者が多いというのが理由ではないことが分かります。図4で2番目に在籍者が多いのは60歳台ですが、図3の退会者を見ると、80歳台の退会者数がほぼ同じです。さらに90歳台や100歳台の退会者率は高くなっています。年齢が高くなるにしたがって退会率も高くなっています。

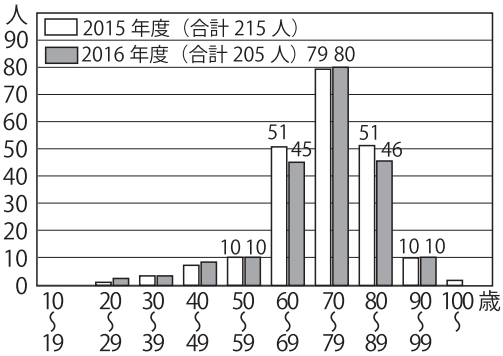


図3　年代別の退会者（含物故者・除籍者）

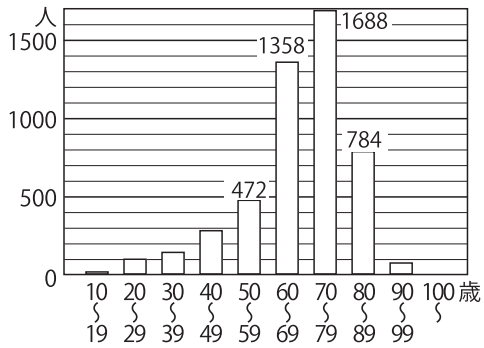


図4　年代別の在籍者構成（2016年度末）

図5は在籍者を生まれ年ごとに分けたグラフで、15年間の推移を見たものです。2001年に1902～11年生まれ（当時90歳台）の会員は38人いましたが、10年後の2011年には2人になっています。1912～21年生まれ（当時80歳台）の170人が10年後は38人に、1922～31年生まれ（当時70歳台）の837人が10年後に478人に減少しています。90→100歳台では95％、80→90歳台では78％、70→80歳台では43％、60→70歳台では20％が減少しています。ちなみに、1942～51生まれ（50→60歳台）が10年間ほとんど変化せず、それ以下の年齢はむしろ増えています。冷徹な言い方になってしまいますが、70歳から年を追うごとに在籍するためのハードルが徐々に高くなっていることが見てとれます。

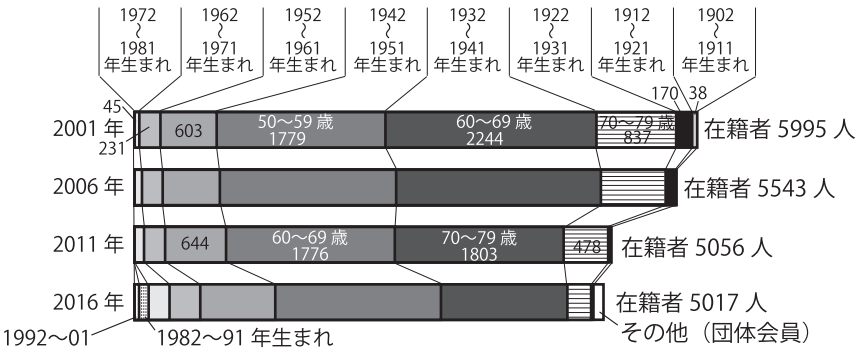


図5　年代別に見た在籍者の推移

当会における団塊世代の問題

上記のことを当会の年齢構成と比較すると、当会が置かれている状況がよく分かります。**図6**が年齢ごとの在籍者数を棒グラフに表わしたものです。

紙面の都合上小さくて見づらいのですが、69歳（1947年ごろ生まれ）が233人と際立って多く、70歳が200人、68歳が199人となっています。62歳以下は100人以下と少なく、67歳から76歳までの人数を合計すると1859人、なんと全在籍者の38％、3分の1以上となり、槍の穂先のような急峻な頂となっています（双耳峰ですが……）。非常にいびつな会員構成と言えます。

図7が10年前、2006年の年齢構成です。そのとき最も多かったのは65歳（1945年ごろ生まれ）で259人、次が66歳で252人でした。1947年ごろ生まれ（59歳）は4番目で、246人でした。

図7から図6への10年間の変化は、左右対称の双耳峰が右に10年分動き、右側斜面が崩落し、左側

も低くなっています。さらに数年後には、この左側の峰は右側の峰ぐらいの２００人以下の低さとなり、今の右側の峰はより低くなることが想像できます。つまり、当会の主流をなしていた年代の会員が後期高齢者化することで、会員数はここ数年で大幅に減少しており、さらに減少することが考えられます。

　非常に大雑把な計算では、２００１年に２２４４人と、最も多かった１９３２～41年生まれは、10年後の２０１１年に１８０３人となり、図５の減少率を適用すると、５年後の２０２１年には１０２８人へと大幅に減少、また、１９４２～51年生まれは、２０１１年の１７７６人から２０２１年には１４２０人へと減少、１９２２～31年生まれは、４７８人から１０５人へ。これからの５年間で、１９５１年生まれ以上は８７６人が減少する計算になります（会員の約18％）。

　なお、これら大幅な減少が訪れることは、３年前の会報「山」で、高原三平・元総務担当常務理事が指摘しています（「高齢化が進む日本山岳会」２０１４年９月号）。

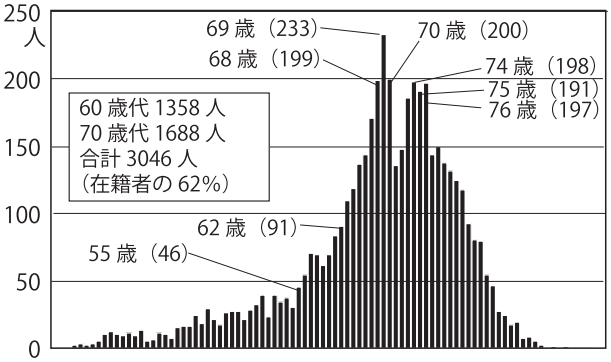


図６　在籍者の年齢構成（2016 年度末）

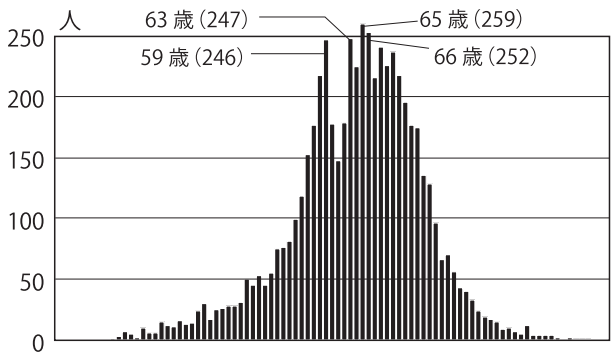


図７　在籍者の年齢構成（2006 年１月）

「オトモダチ作戦」を実施

　当会は、会員からの会費収入で賄われています。そのため、会員の減少は会の円滑な運営や事務管理を阻害し、サービス低下をもたらし、さらなる会員減へと波及していきます。これまでも経費削減などにより会の維持に努めてきましたが、今以上の会員減少は、会そのものの存続を脅かすものです。

　もちろん他方で、会員減に合わせて当会の構成を見直し、縮小を図るべきだという意見もありますが、山好きがいる限り扉を閉ざさず、クラブライフを送れる貴重な場を維持したいと考えます。

　そして、現状の会員獲得方法では、この急激な減少を食い止めることは難しく、積極的に会員獲得を目指す施策が求められます。

　そこで、会員の皆さんにこの状況を認識していただき、全会員による会員獲得活動をお願いしたく考えております。具体的には会員一人一人が、１人以上の会員を入会させていただくこと、友人や家族を入会させていただくこと、を考えております。これを「オトモダチ作戦」と名付け、近く会報「山」に入会申込書などを同封する予定です。

　理想を言えば、５０００人の会員が１人の会員を入会させることで１万人を有する会となり、一挙に磐石な会に変貌を遂げることができますが、そこまでは望むべくもありません。

　現在の当会の活動や会員サービスなどの原型は、会員が６０００人程度だった２０００年ごろを基準としたものです。以後、会員減へと傾斜し、本部や支部の予算は減額が続いて今に至っています。支部への補助金の減額をはじめ、多くの会務に対して交通費や印刷代金などの予算が付かなくなっています。当面の会員数回復の目標は、この６０００人という数字に近付けることです。会務に尽力いただいている会員への負担を軽減すべく、20％の会員増を第一の目標としたいと考えております。

　この会員獲得活動にご理解をいただき、山が好きな人、山に興味を持っている人を、ぜひ入会へとお誘いください。

ANNOUNCEMENT

安全登山推進についてのお願い

会長　小林政志

登山者の高齢化が進むなか、昨今の山岳遭難事故の増加は憂慮すべき状況です。日本山岳会においても近年、事故の発生が増えております。

記憶に新しい、広島支部における一昨年初冬の富士山での2名滑落事故死と、昨年、日高山脈・幌尻岳から下山の際、増水した川を徒渉中に3名が溺死をするという連続事故は、我々に大きな衝撃を与えました。

前者は支部主催の山行、後者は当会の事業外の個人山行でしたが、この2つの事故から見えてきたものは、主に以下の3点でした。

⑴「自己責任」という言葉が曖昧であり、組織的な安全対策意識が不足していた。

⑵不十分な教育体制により、対応力のある指導者育成がなおざりになっていた。

⑶高齢化する登山者の自己能力に対する判定力欠如。

これらの内、まず自己責任についてですが、登山活動において自己責任が伴うのは当然のことです。その上で、まず登山計画書を作成し、行程上で考えられるリスクを多方面から検討し、対応策を考えておく必要があります。さらに計画概要についてリーダーだけではなく、事前にメンバー全員に認識してもらうことも、準備段階で大切なことです。

「登山計画書作成の徹底化と届出態勢の確立の要請」については、遭難対策委員会が会報で告知をさせていただいております。個人山行における計画書の提出については、そこまで必要なのかという意見もありますが、遭難を起こせば多くの問題が発生します。計画書作成という予習が「安全登山推進」の常識という観点からも、登山計画書提出の励行をお願いいたします。

次に指導者の育成についてです。これまでは大学山岳部や社会人山岳会出身者などの経験豊かな方々が、本部や支部における指導者の役割を務めてきましたが、指導者の高齢化や系統立った登山技術習得者の減少などによって指導能力が低下しています。これまでも会員のレベルアップのために、登山教室や支部山行などにおける指導者養成講習会を行なってきましたが、これからは講師の派遣を積極的に実施するなど、さらに注力していきます。

次に高齢者対策です。現在、会員の多くは元気な高齢者ですが、残念ながら体力の低下、なかでも「バランス能力の低下」や「敏捷性の衰え」は否めず、加えて過去の経験からくる過信による事故が増えており、警察庁発表の山岳遭難統計にも表われています。増加する高齢者の安全登山を推進する組織を構築するなど、今後、対応していく所存です。

当会としては、遭難対策委員会によるさらなる安全登山の普及活動や、「身の丈登山」の啓発活動なども検討しており、中長期的視野に立った安全対策に力を入れ、登山事故減少のために、会の内外に向けて施策の実施やアピールをしてまいります。

会員の皆様には安全登山推進のため、ぜひご協力をお願いいたします。

平成30年度(前期)「海外登山助成金登山計画」募集

海外登山助成金審査委員会

日本山岳会では登山界の活性化のため、優れた海外登山計画に対して「海外登山助成金」による助成を行なっています。第39回となる今回も極限探究、新しい課題への挑戦、発想の新しさ、夢多き計画など、創造的でユニークな登山計画を支援したいと考えています。

会員資格やパーティ編成等の条件は問いません。学生や若手クライマーも奮ってご応募ください。

●対象　平成30年8月1日～平成31年1月31日の間に海外の山へ出発する登山隊。

●申込み方法　所定の様式（事務局に請求）に記入し、登山計画書（15通）を添えて申請してください。

●申込み締切　平成30年6月15日（当日消印有効）。

●審査と助成期間　平成30年6月中に審査し、理事会で決定し助成。なお、助成対象となった登山隊は後日、報告書の提出を必ずお願いします。また、会報「山」や機関誌『山岳』に記録を発表できます。

●問合せ・申込み先　日本山岳会事務局☎03-3261-4433

TOPICS

地球の歴史に「千葉」の名前が
――「チバニアン」誕生に向け熱気

千葉支部　三田　博

「チバニアン」という言葉が、にわかに脚光を浴びてきている。「千葉の時代」をラテン語にしたもので、千葉県市原市田淵にある地層が「地磁気の逆転」を示しており、77万年前から12万6000年までの間を、地質学上で「チバニアン」と呼ばれる可能性が高いのだ。46億年の地球史の中に、「千葉」の名前が刻まれるとあって、地元では地学マニアならずとも熱気を帯びている。

3月18日に市原市民ホールで、千葉県立中央博物館が主催した講演会「誕生なるか！チバニアン」には1200人もの人が押し掛け、研究者たちの発表に熱心に耳を傾けた。学術的な講演会にこれだけの人が集まるというのも、大変珍しいと思われる。

地磁気の逆転、つまり方位磁針のN極が南を指していたことは何百回もあり、過去360万年間だけ見ても、11回確認されているという。その最後にあたる77万年前に起きたN極とS極の逆転について、現在と同じ正磁極に戻る様子が連続して堆積しており、それが確認できるのは、イタリア南部と房総半島のこの場所だけで、なかでも市原の地層は観察するのに優位な条件を具えているために、「国際標準模式地（GSSP）」に選ばれる可能性が高い。本来なら地中深く埋もれているはずの77万年前の地層が、奇跡的に地上に露出したのは、房総丘陵の活発な隆起と、養老渓谷がもたらす浸食作用によるものだという。

1200人もの聴衆が押し掛けた講演会

逆転がなぜ起こるのかというと、正確なメカニズムは謎のままだが、地球内部のマントルの対流の変化によると考えられている。地磁気は直近2000年で10％も弱くなっており、約2000年後にはゼロになり、再び逆転が起こるのではないかとも考えられている。

市原の磁場逆転の地層は、以前から知る人ぞ知る場所だった。マスコミで報道されたことから、現地は早くも観光地化してきており、休日などは訪れる人が途切れることがない。「チバニアン」という愛称のような命名で、親しみやすくなったのも一因かもしれない。しかし、いざ来てみると、目の前にあるのは「ただの崖」があるだけである。「どこが、どうすごいのか」を知りたくて、講演会にもたくさんの人が足を運んだのだろう。

早くも観光地化している市原市田淵の地層

「チバニアン」が選定されれば、世界で69番目のGSSPとなる。この講演会でチバニアン申請チーム代表の岡田誠・茨城大教授は「世界に1000ヶ所ある世界遺産よりはるかに希少性があり、千葉のこの地層が将来、地学の聖地になるだろう」と話した。市原市では現地の保護と保存を進めるため、国に天然記念物の指定を働き掛けていくという。

千葉支部でも、歴史的な「チバニアン」誕生に合わせて何かできないだろうかと仲間と話し合っているところ。見学会やシンポジウムの開催から周辺の清掃まで、様々な活動ができるはずだと思う。

「チバニアン」は、残る3回の国際学会の委員会を経て、来年にもその時代を代表するGSSPに正式認定される見通しだ。その証（あかし）として、ゴールデン・スパイクと呼ばれる金の杭が打ち込まれるのは、77万年前に起こった御嶽山の大噴火による火山灰が堆積した層だという。

（千葉支部事務局長）

REPORT

医療委員会主催「雪山の医療」講演会報告

医療委員会　浜口欣一

2月26日、日本山岳会ルーム104号室で、雪山の医療について野口いづみ・医療委員会委員長が講演した。医学的な側面から低体温、凍傷、雪崩遭難の対処・予防、さらに心肺蘇生について、多くの図・表・自験例の写真を駆使して紹介した。

低体温症

低体温症は体温の低下によって起こり、冬山に限らず雨、雪、汗などで身体が冷えることで生じる。三大原因が低温、濡れ、風である。それを防ぐには熱伝導の遮断、保温、防風対策が必要である。身体面から見ると、体が小さい方(女性や子ども)が熱を失いやすく、筋肉量が少ない方が熱産生が少なく、皮下脂肪の多い方が保温性は良い。結果的に、性別では男性よりも女性の方が皮下脂肪は多いが熱の産生が悪く、寒さに弱い。なお、逆に熱中症は男性の方がかかりやすい。年齢では、高齢者は温度センサーや調節機能低下などにより低体温症になりやすい。

体温にはコア温度（体の深部で37℃に保持）とシェル温度(体の表面温で環境温に応じて変化）があり、コア温度が一定になるように調整されている。コア温度が35℃以下になると低体温症になる。震えは寒さに対して熱を産生する防御反応で、低体温症の重症度は震えと意識の有無で判断できる。つまり、軽症では震えがあり、中等症では震えが弱くなって意識障害が始まり、よろめいたり、すぐ眠り込むようになる。重症では震えが止まり、意識がなくなる。最重症では呼吸と脈搏が弱くなって心肺停止へ至る。

予防は、低温対策には衣類が重要。断熱性のある衣類を着て、重ね着をする。放熱量の1／3は頭からなので、首や頭の保温が大切。濡れには速乾性の衣類を着て、濡れたら着替える。U社のインナーウェアHはレーヨンを含み、濡れると乾きにくいので冬山には不適。アウターは防水透湿素材を着用する。羽毛はいったん濡れてしまうと乾かないので、アウターには不適である。衣類以外の予防としては飲水と栄養摂取も重要。低体温症では脱水になりやすいので、温かい飲料（ココアなど）と糖質（炭水化物）を十分に摂る。風の当たらない場所に避難する、震え・動作緩慢・眠気・無関心などの低体温症の早期症状に対して仲間同士で注意する、などである。

治療は保温が重要で、濡れた衣類は着替える。レスキュー・シート、ツエルト、テント、雪洞、小屋避難などして風を避ける。携帯カイロ、ペットボトルで太い血管を温めるか、プラティパス(携帯ソフトボトル）を使用して胸を加温する。温かい飲み物を飲ませる。嗜好品は、アルコールは代謝分解に水分が必要、コーヒーはカフェインが多く利尿作用が強い、ニコチン(たばこ)は末梢血管を収縮させ、血行を悪化させるなどの作用があるので、摂取を避ける。中程度以上の低体温症では、救出後のショックに注意を払う。末梢を急に加温すると末梢の冷えた血液がコアに移動し、重症の不整脈（心室細動)を起こすことがある。これを防ぐには、手足のマッサージと急激な加温、すぐに歩かせることは禁忌で、手荒に体を動かさず、搬送は水平で行なう。

凍傷

凍傷は寒冷により細胞が破壊された状態で、手足の先、顔面、耳に発症することが多い。演者も手指の凍傷に10回くらいかかったことがある。軽症のⅠ度（蒼白→発赤、腫脹）と中程度のⅡ度(水泡)は表在性で、知覚鈍麻を起こし、その後、痛痒、ずきずきした痛さを感じる。重度のⅢ度は深部性で、皮膚が壊死して白くなり、知覚鈍麻が起こる。のちに黒紫、萎縮を起こす。

予防は、低体温症を防ぎ、濡れを避け、手足、耳、鼻、頬の保温に努める、靴紐や手袋などで締め付けないようにする、食糧(炭水化物)を充分に摂る、手首をリストバンドなどで締める、などである。意識的に体を動かすことも必要で、腕を強く振る、一人ボクシング(片手でグー、反対の手でパーの形を作り、相互に叩き合う)をする。末梢循環を良くする内服薬や軟膏を使用する(ユベラ、漢方薬、ヒルドイド軟膏など)。日常生活で手袋を

せず、寒冷に慣らす耐寒訓練も効果が期待できる。

　治療は、なるべく速い処置が必要。靴や手袋で締め付けていれば緩め、40℃前後の温水で20分以上温める。してはいけないことは、手足の強いマッサージ、末梢の急激な加温、直火に患部を近付けること、水疱を破ること、などである。再凍結すると組織のダメージが大きいので、再凍結の危険があるときは温水で急速融解してはいけない。ヘリコプターなどで迅速な救出ができる状況になって、はじめて急速融解を始める。

雪崩遭難

野口いづみ委員長によるイラストなどを駆使した講演は好評

　雪崩事故による埋没時間経過と生存率はほぼL字状のラインを示し、4つの相に分けられる。第1相は埋没後18分程度までで、主に外傷によって死亡する段階。第2相は35分程度までで、急激に窒息が進行して死亡する段階。第3相以後は生存曲線の低下は緩やかになる。第3相は130分程度までで、エアポケットの空気が少なくなって低体温症が進行する段階。第4相はエアポケットの空気が枯渇し、低体温症が一層進行した状態である。報告による差はあるが、15分以内に掘り出された場合の生存率は90％以上、以後急激に低下し、30～35分で34～40％、60分で26％、130分で7％程度とされる。死因で最も多いのが窒息（米国・カナダの報告で90％以上、カナダで75％）で、次に外傷が続き、低体温症は死因としては少ない。

　対策は一刻も速く掘り出すことで、最初の30分が大事である。周囲の安全を確認し、周辺の人々にも応援を求め、迅速に救助を開始する。最初の20分は五感とビーコンを使って徹底的に探し、場所が特定できたら速やかに救助要請をする。ゾンデに手応えがあったらゾンデは残し、エアポケットを壊さないように、横方向（対角線）から顔（口と鼻）を最優先に掘り出す。口の中に雪が詰まっていれば取り除き、意識がなければ頭を後屈させるか、頸のケガが疑われるときには下顎の左右の角（エラ）を持って引き上げて、気道確保する。掘り出し後はツエルトに収容し寝袋に入れる。意識がなく、呼吸があれば横向きに寝かせる（回復体位）。

　雪崩に自分が巻き込まれてしまった場合は、雪崩の端の方に逃げる、ザックを外す、口と鼻を手で覆ってエアポケットを作る、雪崩の表面に出るように泳ぐ（もがく）、手足が雪面上に出るように暴れる、雪崩が止まると急に雪が締まるので、呼吸ができる空間を腹と胸周りに作る、救助が来たらできるだけ大きな声を出す、などである。

　三種の神器であるビーコン、ゾンデ、スコップは必携。ビーコンのチェック（スイッチの入れ忘れ、送信モードになっているか）をする。雪崩エアバッグやアバランング（埋没時に呼吸を換気する器具）も使われている。

　埋没者の心肺蘇生としては、まず反応を見るために名前を呼んだり、耳元で大きな声を掛ける。強く揺さぶると頸椎を損傷させる危険があるので、してはいけない。雪崩埋没者の多くの死因が窒息なので、人工呼吸（呼気吹込み）は非常に有効である。

＊

　募集を上回る34名の申し込みがあり、出席者は27名だった。男性17名・女性10名、会員13名・会員外14名で、別に資料請求が4件あった。年齢は34～71歳（平均は54・8歳）で、若い方が多かった。アンケートは23名が提出し、「とても良かった」が17名、「良かった」が3名、不明・無記載が3名だった。今後希望するテーマは、レスキュー、高山病、トレーニング、膝痛・腰痛対策などだった。今後の活動に活かしたい。

　医療委員会ホームページ（http://jac.or.jp/info/iinkai/cat64/post-1415.html）に詳細を掲載した。ほかに当会アルパインスキークラブ会報『雪上散歩』24号（2014年）69～73ページ「雪崩遭難者の医学的対処」、25号（2015年）71～75ページ「加齢と低体温症―高齢者は低体温症になりやすいか―」も参考になるだろう。

REPORT

第2回山岳自然環境セミナー
「山の自然が崩壊する　続・深刻化するシカの被害」を開催

自然保護委員長　川口章子

近年、日本列島の各地でニホンジカの個体数が急激に増加し、その生息域が高山・亜高山帯にまで拡大し、山岳地の生態系に深刻な影響を与えています。

シカの被害として森林の衰退、希少植物の消失、土壌の浸食などが発生し、我が国の豊かな生物多様性を守る上で、一刻も放置できない問題となっています。

そこで、山岳地におけるニホンジカ問題の緊急性を強く訴え、被害対策の促進を図ることを目的として、3月11日㈰に国立オリンピック記念青少年総合センターで、昨年に続き「第2回山岳自然環境セミナー」（主催／山岳団体自然環境連絡会、後援／環境省）が開催されました。駒澤大学名誉教授・野島利彰氏の基調講演「ヨーロッパ狩猟の過去と現在」に始まり、各種報告を受けてのパネル・ディスカッション、討議&質疑応答と続き、多くの参加者が熱心に聞き入っていました。

〈注〉山岳団体自然環境連絡会の構成団体は以下のとおり。（公社）日本山岳・スポーツクライミング協会、日本勤労者山岳連盟、（公社）日本山岳会、NPO法人日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト、（公社）東京都山岳連盟、（公社）日本山岳ガイド協会、山はみんなの宝クラブ

ニホンジカによる被害状況

ニホンジカは、我が国の農林業にとって最悪の加害獣となってしまいました。農林水産省の被害状況報告（2015年度）によれば、林業被害は全国で約6000haに及び、野生鳥獣による被害総面積の77％を占め、被害金額を試算すると約80億円になります。農作物は野生獣類による年間被害面積約7万haの7割以上をニホンジカによる被害が占め、被害総額は65億になります。被害は生態系にも及んでいて、彼らの旺盛な食欲は希少な植物を絶滅の危機にさらし、また、下層植生の消失は傾斜地崩壊など国土保全問題も引き起こしています。

ニホンジカの分布はどんどん拡大し、環境省の自然環境保全基礎調査によれば、1978（昭和53）年には国土の24％、2004年には42％、2014年には59％と拡大しています。この勢いが続くと仮定すると、2025年ごろには全国津々浦々にまで分布域が広がるでしょう。

〈注〉大人のシカが食べる植物の量は1日に1・5kgくらいですが、これは生の葉では5～6kgにもなります。これだけの量を毎日食べるのですから、シカの密度が高くなると、植物側は強い影響を受けることになります。

分布拡大が続く要因

いくつかの説がありますが、

①冬季の豪雪や異常低温が昔ほどなくなった上に、樹皮や落ち葉を食べるようになって餌不足から解放され、冬季死亡率が減少した。

②地域社会の変化による「負の螺旋（らせん）」ともいえる、耕作放棄地や放棄果樹園が生息適地となってシカを誘引し、被害がさらに増加し、生産意欲を低下させて過疎化を促進、さらなる耕作放棄地を生んでいます。こうして日本の里山に活気がなくなり、野生動物に対する防衛力もなくなっています。

③最も重要なことで、ニホンジカの繁殖力が圧倒的に強く、メスは生まれた翌年に仔を生むことができ、毎年8割以上のメスが妊娠しています。年間増加率は20％にも達します。これだけの強い繁殖力を持つ動物であることに気づかずメスを保護してきた上に、禁猟が

ブナの幹に残る痛々しいニホンジカの食痕

解禁されたのが２００７年でした。

捕獲に向けての政府の取り組み

２０１３年には、環境省と農林水産省が「抜本的な鳥獣捕獲強化対策」を策定しました。当時の捕獲率で推移すると、本州以南のシカの頭数が２０２５年度には、２０１１年度のほぼ倍の５００万頭に達する可能性があると試算されたからです。２０１５年には捕獲の促進とその担い手育成を目指して「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律の一部を改正する法律」を施行、ニホンジカを第２種特定鳥獣として指定し、「指定管理鳥獣捕獲等事業」の創設、「認定鳥獣捕獲等事業者制度」の導入という２つの施策を進めました。また、住居集合地域等における麻酔銃猟の許可および網猟免許や罠猟免許の取得年齢の引き下げなどが行なわれ、その効果が期待されています。

様々な講演や報告、討議のあったセミナー会場

捕獲は単に数を減らすだけではなく、何を守るのかを明確にしなければなりません。そのためには調査が重要です。調査はまず、自然公園の中でどういった植物が被害を受けているのか、どこにシカが分布しているのか把握しなければなりません。また、捕獲したシカにＧＰＳの首輪を付けて、季節的にどう行動しているかを詳細に調査します。

そのほか、センサー・カメラを広範囲に設置して写るシカの数から個体数を推定し、密度を把握することもでき、ＧＰＳ調査と併わせることで、捕獲によってどの程度密度が減ったかを知ることができます。

調査や捕獲の効果が出るまでには時間が掛かるため、守らなければならないものはまず柵で囲い、樹木にネットを巻いて森林を守っています。

国立公園は山岳地帯も多く、捕獲は危険を伴います。とはいえ、低所での捕獲の継続により捕獲圧のない高山帯へシカが移動し、たまってしまうことが考えられるため、高山帯でもなんらかの捕獲圧を掛けることによって、そこを逃げ場としないような対策を採ることが課題となっています。

そのほかにも、餌付け防止を呼びかける啓発や、土壌流出に対してマットを設置して浸食を食い止めるというような対策も行なっています。

登山者として何ができるか

環境省の生物多様性センターでは「いきものログ」というシステムを作って情報を集めています。たとえば、スマートフォンでも専用アプリで写真を撮って報告すると、それがデータベースとなってアップされ、シカ情報のプラットフォームになり活用できます。

また、昔の山と今の山とを比べたときの変化が分かる写真は、インパクトのある情報として伝えられます。

国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所では、「シカ情報マップ」による目撃情報の収集を行なっています。ＱＲコードからアクセスし、「シカ目撃報告」を選択すると報告ページへ移りますから、シカの性別（オス、メス、不明）と頭数をプルダウンによって選択して、発信すれば報告完了です。

登山者の立場から、山でシカが増えているという事実を発信することが重要です。そして、一般の人にも伝え、様々な立場の人が様々な理由から問題提起をしていくことが大切です。

本年の会報１月号および２月号でお知らせしましたが、日本山岳会会員専用のＱＲコードを再掲載しますので、ぜひ活用してご協力ください。

〈第１回および第２回「山岳自然環境セミナー」資料より〉

NEWS

新燃岳噴火に伴う霧島連山の現状

宮崎支部　畑島良一

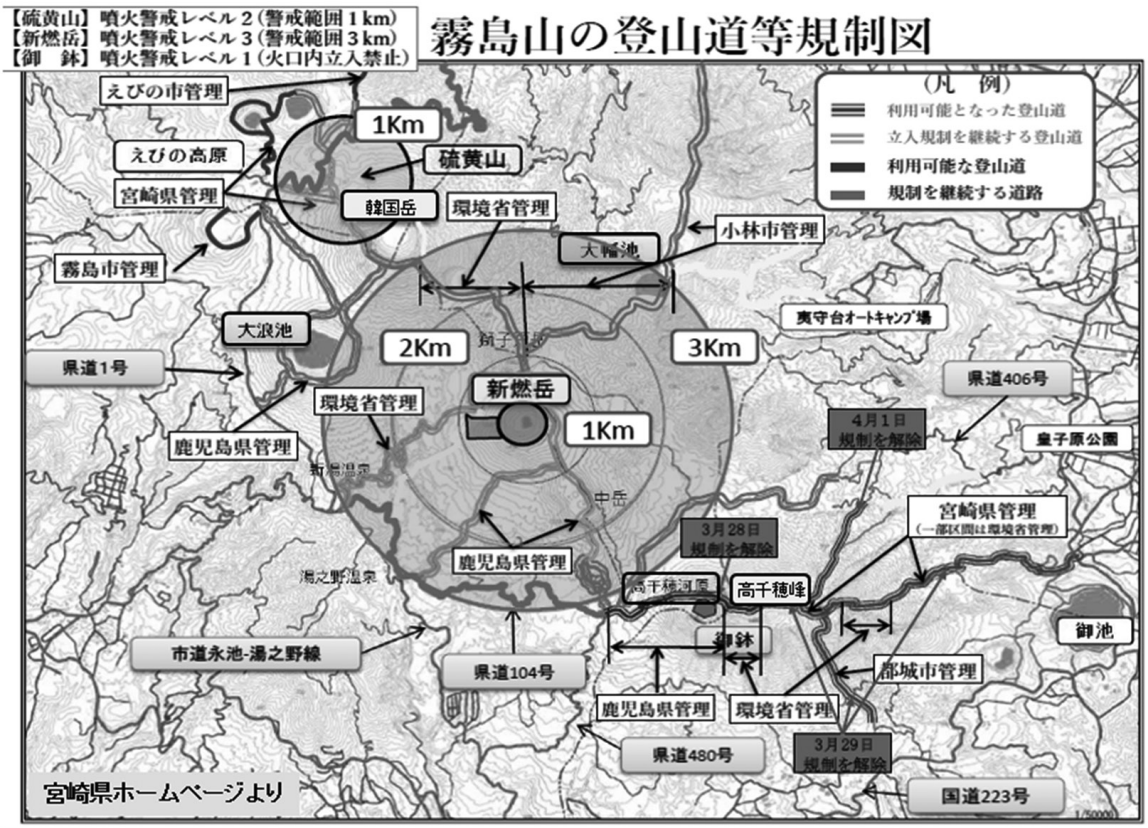
平成23年1月、宮崎県と鹿児島県境にそびえる霧島連山・新燃岳（1421m）が噴火し、周囲の生活に多大な影響を与えた。以来収束し静穏期が続いていたが、今年2月の半ばから火山性地震の回数が漸次増加し、3月6日に18回、翌7日は16回もの爆発的噴火を起こした。噴煙は3000mから4500mに達し、降灰は周辺地域の交通、産業、農作物等に多大な影響を及ぼした。火山性地震は7日の799回を最高に200回を超える日が続いた。25日の噴火以降、沈静化したように見えたが、4月3日に火山性地震が490回と急増し、5日未明に噴火した。8000mの火砕流も観察され、噴煙は8000mに達した。

このように依然として予断を許さない状況が続いており、噴火警戒レベル「3の入山規制」は継続中である。通行禁止登山道、立ち入り規制区域、車道の閉鎖などは、図と下記事項を参照していただき、霧島連山を訪れる際には刻々と変化する火山活動に留意して、最寄りの公共機関等から最新情報の把握に努められたい。

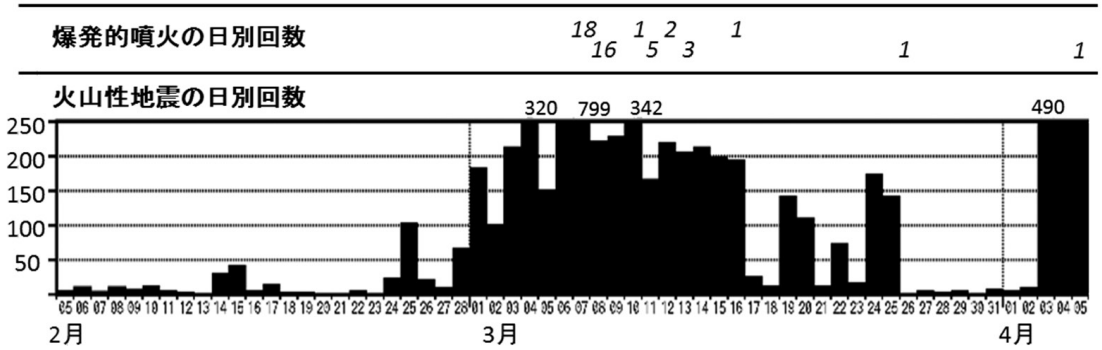
霧島連山は、最高峰の韓国岳（1700m）や霊峰・高千穂峰（1574m）を中心に周囲に連なる山塊を示している。火山性地形ではあるが、緩やかな山体を有する優美な形状を成している。山岳美に加えて火口湖・高原・温泉など観光資源に恵まれ、「霧島錦江湾国立公園」に指定されている。また、ジオパークとしても認定されており、日本百名山の一つでもある。

高千穂峰から中岳（1332m）―新燃岳―韓国岳の間は、〝黄金ルート〟として多くの先輩たちから縦走の爽快さを聞かされた。また、周辺の大浪池・えびの高原などの多くの池や高原は、青少年や家族連れにとって憩いの場にもなっている。なかでもミヤマキリシマが咲く時期には山々が赤く染まり、登山者や写真愛好家のメッカとなっている。

このたびの噴火は、登山者や観



新燃岳の火山性地震と爆発的噴火の日別回数（本図は気象庁HPの図を基に作成した）



光客にとって残念な状況である。これ以上、農業・酪農・漁業・交通機関への直接・間接的被害が及ばないことを願うばかりである。

通行止めの登山道

＊中岳―新燃岳―韓国岳―硫黄山間の登山道

＊大浪池周回コース

＊夷守（ひなもり）岳・大幡池へ通じる登山道

通行止めの自動車道

＊宮崎県道1号の一部、鹿児島県道104号の一部

関連施設

＊高千穂河原ビジター・センター
☎0995-57-2505

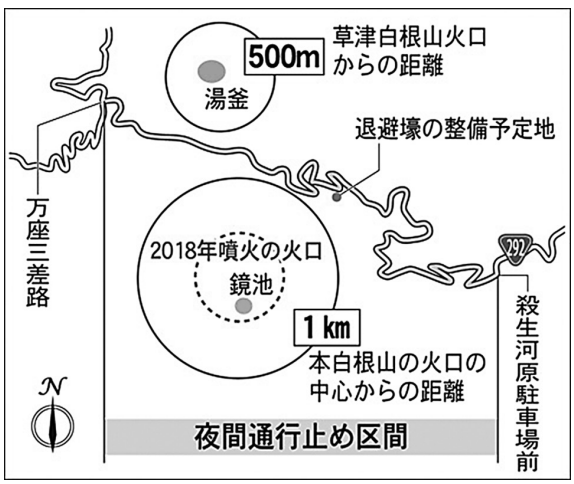
＊えびの高原エコ・ミュージアム
☎0984-33-3002

草津本白根山の警戒レベル引き下げ
――立ち入り規制は半径1kmに

群馬県草津町の本白根山（2171m）は1月23日の死傷者を出した突然の噴火以来、警戒レベルが「入山規制の3」に引き上げられ、火口から半径2kmの範囲への入山が規制されていた。一方、この日以降噴火は発生しておらず、火山性地震は徐々に減少しながらも継続する傾向が続いていた（気象庁は引続き1月23日と同様な噴火が発生する可能性も指摘している）。

このようななか、3月16日から新たに運用が始まった本白根山の噴火警戒レベルが「2の火口周辺規制」となったことを受け、地元の草津町では、立ち入り規制の範囲を火口付近から半径1kmに縮小した。

また、一部が立ち入り規制の範囲にかかっていた、群馬県の草津温泉と長野県の志賀高原を結ぶ日本有数の高地を通る国道でもある「志賀草津高原ルート（国道292号）」についても、道路管理者である群馬県が、冬季閉鎖が解除される4月20日から通行できるようにする方針を示した。除雪作業が予定どおり進めば、同日に開通することになる（ただし、当面、夜間は殺生河原駐車場前から万座三差路までの区間は通行止めとなる）。



これにより、首都圏をはじめ各地から志賀高原の山々へ向かうアプローチ・ルートは、春以降も昨年の冬季道路閉鎖前の状態が維持されることになる。しかし、噴火のあった本白根山への入山は引き続きできず、砂礫地に咲くコマクサや、湖岸から湖底にかけて広がる網目模様の構造土が特徴的な、美しい鏡池を見ることもできない状態が続く。

〈3月17日付・上毛新聞より〉

（群馬支部事務局長・根井康雄）

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

石川支部
創立70周年記念式典を開催

石川支部は昭和22年1月に創立され、平成29年に70周年を迎えた。創立を記念して2月3日に式典を執り行なった。会場は金沢駅前ホテル金沢「風の間」。午後4時半受付開始だったが、参加会員は皆この式典を楽しみにしていたようで、午後には早々に集まり、しばらくロビーでお待ちいただいた。午後5時より全員着席、八十嶋会員の司会により開会とした。まずは岡本会員の発声で創立50周年以降の物故者に黙祷を捧げた後、改めて式典開会となる。

始めに中川支部長より、「創立以来70年の年月が流れたが、これまで大きな事故もなくこの日を迎えられたことをともに喜びたい。創立50周年の節目には記念講演や記念誌発刊を行ない、さらに60周年にはインド・ヒマラヤへ遠征隊を派遣、未踏の6342m峰に登頂しマーン峰と名付けた。10年の歳月はすべて懐かしく思われ、本日集う皆さんの心の宝になっていることと思う。また、70周年を迎えるに当たり、今一度足元を確かめ、さらなる歩みを進めるための機会にしたい。本日は多くの会員、また遠方より参加いただいた方に篤くお礼を申し上げる。さらに現在は会友であるが、本部会員になる申請をいただいている方、また、日本山岳会へ新たに正会員として入会を希望されている高校生と中学生兄弟のお話もある。会員が増え、さらに前進する礎となるよう、力を合わす山仲間であり続けたいと思う」との挨拶があった。

その後、感謝状贈呈式を行なった。贈呈されたのは、馬場勝嘉永年会員、津田文夫顧問、澤村眞治永年会員、太田義一会員、多野正一会員、廣瀬幸寛会員の各位(馬場会員はご高齢のため、式典には欠席、後日お届けした)。支部長より各人に感謝状と記念品が渡された。

この後、参加者42名により記念祝賀懇親会となる。大庭副支部長より開宴挨拶があり、旧会員も参加して大いに盛り上がる会となった。楽しい時間はあっという間に過ぎ、最後に今回の記念式典実行委員長・樽矢会員より、日本山岳会並びに石川支部の会員減少による厳しい現状、また、会員増強の取り組み事案、会員の平均年齢などの説明があった。さらに、今後の石川支部の主な公益事業としての登山道整備、親子登山教室などの継続推進をお願いする旨の挨拶があり、参加者全員で記念写真を撮り、お開きとした。

今回の式典には、多くの先輩支部会員、旧会員に参加していただき、改めて70年の重みも感じる。支部活性化において、そのいずれも欠かせない存在であり、会員各年代が集える企画が必要であると考える。今後の支部運営に活かしていきたいと思う。

(樽矢導章)

図書紹介

八甲田山消された真実

伊藤薫著

2018年2月
山と溪谷社刊
四六判　352ページ
1700円＋税

本には、ずっとクールに読み通せるものと、著者に思い入れをしてしまうものとがある。本書は多くの読者にとって後者かもしれない。

新田次郎の小説『八甲田山死の彷徨』や、それを原作とした映画

『八甲田山』で広く一般に知られた旧陸軍歩兵第五聯隊の雪中行軍だが、本書では私たちの想像を絶する、驚くべき事実が明らかにされている。青森生まれの元自衛官で青森第五普通科連隊に勤務し、八甲田演習も経験している著者は、在職中からこの雪中行軍の詳細を調べることに使命感を感じていたと言う。退官後、生存者の証言記録や新聞記事を丹念に読み、大本営発表などの報告書との矛盾点を洗い出し、真実を探っていく。

　かいつまんで記せば、この行軍は弘前の三十一聯隊に遅れを取ってはならじとの聯隊長の名誉欲、メンツのために実施されたものであること、予行や準備（装備）に十分な時間も掛けず、そもそも目的地である田代新湯の場所を誰も知らないままに実行されたこと、などである。確かに寒波が来ていて気象条件は厳しかった。

　しかし、軍隊にあって「勇気ある撤退」が通用するはずもない。ルートが判然としない吹雪の中をいたずらに突き進み、判断能力がなくなった隊は、指揮命令系統も壊れ、脱走兵さえ出る有様だった。最近の山岳遭難事故そのままである。救助態勢もスピード感を欠き、結果として１９９名もの死者を出すに至った。加えて大本営発表などの報告は、生存者には口止めをして事実を隠蔽し、都合よく捏造されたものだった。それにもかかわらず、聯隊長はのちに栄転しているのだ。データ改竄（かいざん）、捏造――昨今の報道と体質的には同じことだ。もちろん戦争を肯定はしないが、戦場ではなく、このような経緯の中で命を落とした隊員の無念さを思う。

　著者は行軍の事実を解明することで、こんな過ちは繰り返してはならない、とのメッセージを発信している。しかし、東日本大震災の支援に加わった折に沿岸で目にした、過去の津波の教訓を後世に伝える石碑を例に出して、これが活かされておらず、「人は危機意識を持続できないようだ」と嘆き、「悲劇は繰り返される」と書いている。事実を解明する過程で著者が感じた「ぶつけようのない怒り」、その後の「無力感」に共感を覚える。

（荒井正人）

Climbing&Medicine・82

漢方薬は登山にも役立つ（2）
筋肉痛、打撲、疲労に対する漢方薬とイミダゾールジペプチドの効能
－特に芍薬甘草湯の無効例に対して－

大野秀樹

本会報第861号の「漢方薬は登山にも役立つ」で、こむら返りのときの芍薬甘草湯（68）の即効性を報告した。一方、少数派ではあるが、芍薬甘草湯の無効例が存在する。ここでは、その代用漢方薬を紹介するとともに、打撲に対する漢方薬と筋肉痛や疲労の予防効果を有するイミダゾールジペプチド（イミダ）も紹介したい。

疎経活血湯（53）　こむら返りに対して、芍薬甘草湯が無効例で速やかに症状が消失する場合が多い。芍薬、甘草を含む17味から構成されていて、構成生薬数が少ないほど急性期の症状に優れている、という原則に当てはまらず、興味深い（伊藤隆：漢方と最新治療 25:103-109, 2016）。加えて、四物湯（71）も、即効性は芍薬甘草湯よりは劣るが、有効性はほぼ匹敵する。こむら返りは、降圧薬（ARB、カルシウム拮抗薬）、高脂血症治療薬（スタチン）、利尿薬などの副作用で出現する場合があり、注意を要する。

治打撲一方（89）　江戸時代に生まれた、本邦オリジナルの漢方薬である。下肢の打撲や捻挫に対して有効であり、概ね３～４日以内に改善する。

高齢者の顔面打撲でも有効であり、３～５日間の服用によって約９割の顔面腫脹になんらかの効果が得られる（吉田哲：脳神経外科と漢方1:17-22, 2015）。特に、高齢者は登山中に転倒しやすく、必携の漢方薬の１つだ。できる限り早期の服用が望ましい。

中高年登山者は、山中でよく足を攣ったり、筋肉痛を起こす

イミダアラニンとヒスチジンの２つのアミノ酸からなるジペプチド・カルノシンが代表的である。鳥の胸肉に多く、長距離を何日もかけて連続飛行する渡り鳥のスタミナ源として知られている。それは、イミダゾール基が持つ抗酸化作用によって酸化ストレスの上昇を軽減し、その結果、細胞機能の低下が抑制され、脳に疲労を伝えるTGF-βの増加が小さくなるからだ。TGF-βは、慢性疲労症候群の原因物質とも考えられている。イミダ200mg/日以上の摂取で、かなりの効果が得られる（鶏胸肉100g にイミダ200mg 含有）。タフな登山の２～４週間前からの摂取が望ましいが、毎日鶏胸肉を食べるのが困難な人は、サプリメントが入手可能である。さらに、成人男性に200回のスクワット運動をさせ、運動前・後、および翌日から４日間、イミダ２g を含む鶏胸肉エキスを摂取させたところ、プラセボ（擬似食品）群と比べて遅発性筋肉痛（DOMS）の程度が明らかに小さくなり、筋肉痛の緩和にも有効であることが示唆される（前村公彦・他：環太平洋大学研究紀要1:83-87, 2008）。

登山と漢方薬は、さらに奥が深そうである。なお、カッコの数字は（株）ツムラの番号を示す。

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご活用ください。
日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会　http//jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html

会務報告

平成29年度第10回(3月度)理事会議事録

日時　平成30年3月14日㈬19時00分～21時00分
場所　集会室
【出席者】小林会長、重廣・野澤・中山各副会長、神長・永田・古川・谷内各常務理事、安井・清登・齋藤・星・近藤・波多野各理事、平井・石川各監事
【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・平成30年度事業計画について

平成30年度事業計画について審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

2・平成30年度予算概要について

平成30年度予算概要について審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

3・職員就業規定の改正について

職員就業規定を改正することについて審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

4・平成29年(後期)海外登山助成対象登山隊審査について

海外登山助成金審査委員会の審査結果を受け、平成29年(後期)海外登山助成対象登山隊として「K2[8611m]West Face Project」に対し、15万円の助成を行なうこととした。(賛成14名、反対なしで承認)

5・平成30年度上高地山岳研究所管理人雇用契約およびアルバイト採用契約について

平成30年度の上高地山岳研究所管理人雇用契約およびアルバイト採用契約の締結について審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・平成30年度委員会等予算査定の概要について(古川)

財務委員会からの平成30年度委員会等の予算査定の概要について協議した。

2・包括保険制度の導入について(永田)

当会主催山行における山岳保険未加入者に対応するために包括保険制度を導入することについて協議した。

【報告事項】

1・入会希望者10名、準会員入会

希望者10名および準会員から正会員への移行希望者4名について入会承認を行なったとの報告があった。(小林)

2・助成金1件の受け入れについ

第20回「秩父宮記念山岳賞」の推薦募集について

秩父宮記念山岳賞審査委員会

第20回「秩父宮記念山岳賞」の推薦(他薦に限る)を次のとおり受け付けます。事務局まで資料をご請求ください。当会のホームページを活用される方は、推薦募集の詳細を掲載しておりますので、推薦要項・所定様式(ダウンロード可能)などをご参照ください。多数のご推薦をお待ちしております。

なお、本賞は公益目的事業でありますから、受賞対象者を本会会員またはグループに限定しておりません。

◎対象分野　登山活動／山岳に関する文化的活動、学術的業績
◎提 出 先　日本山岳会内　秩父宮記念山岳賞事務局
◎締 切 り　平成30年８月31日(金)

て報告があった。（古川）

3・一般社団法人・日本山岳検定協会からの「平成30年度山の知識検定（第8回）」への名義後援申請、㈱実業之日本社からの「ブルーガイド創刊ラインナップ電子復刻版」（仮称）への著作権許諾申請に対し、これを承認したとの報告があった。（永田）

4・広島支部再生委員会の開催状況について報告があった。（重廣）

5・平成29年度第7回登山教室指導者養成講習会の開催状況について報告があった。（重廣）

6・第2回記念事業委員会の開催状況について報告があった。（重廣）

7・遭難対策規程および遭難対策運営要領の修正箇所について報告があった。（中山）

8・平成30年度新永年会員候補者および平成29年度末除籍滞納予定者について報告があった。（谷内）

9・理事会等日程の変更について報告があった。（谷内）

10・家族登山普及委員会主催「家族登山教室」2018年の年間予定について報告があった。（波多野）

11・「山」3月号の発行について報告があった。（神長・節田）

【今後の予定】

1・常務理事会・理事会
・平成30年度4月度常務理事会
平成30年4月3日㈫18時30分～
・平成30年度4月度理事会　平成30年4月11日㈬19時00分～

ルーム日誌 3月

1日　YOUTH CLUB
2日　科学委員会「山の日」事業委員会
5日　総務委員会 記念事業委員会
6日　常務理事会 スケッチクラブ
7日　図書委員会 山行委員会 バックカントリークラブ
8日　山岳地理クラブ 九五会 マウンテンカルチャークラブ
12日　自然保護委員会 スキークラブ スケッチクラブ
13日　山岳研究所運営委員会 支部事業委員会 フォトクラブ
14日　理事会 休山会 山想倶楽部
15日　科学委員会 みちのり山の会 マウンテンカルチャークラブ
16日　YOUTH CLUB 二火会 山の自然学研究会
19日　総務委員会 資料映像委員会 バックカントリークラブ
20日　会報編集委員会 三水会 つくも会 スキークラブ
22日　改革事業推進委員会 学生部 山遊会 フォトクラブ
26日　青年部
27日　デジタルメディア委員会 遭難対策委員会 スケッチクラブ 平日クラブ
28日　家族登山普及委員会 00会 麗山会 スケッチクラブ
29日　YOUTH CLUB
31日　土曜会

3月来室者　447名

会員異動

物故

室　次雄（53573）18・2・28
荻野恭一（54663）18・3・27
原　謙一（63853）18・3・12
大坪重遠（9594）18・3・14
袖山要一（103493）18・3・24
中西健一（103543）18・2・14
高木　徹（121132）14・9・22
福島寿信（152243）18・3・18

退会

本片山数雄（3087）広島
トヨタ自動車㈱（3917）東海
安藤久男（5547）北海道
吉川友章（5801）
近藤保人（6762）
佐藤邦彦（6822）福島
渡辺弥生（7132）
山田哲郎（7384）首都圏
佐久間満男（7564）福島
山森欣一（8215）
山本節生（8785）東九州
小林直人（8793）東海
松田和弘（9381）
遠田篤子（9462）
森山美理子（10207）
桑原一郎（10231）越後
中西光子（10355）
中村　昭（10363）
榛葉華子（10685）静岡
召田俊雄（11116）埼玉
林　豊敏（111131）京都・滋賀
秋澤保昭（11468）
寒河江朋男（11822）
中條俊一（11838）宮城
西條好廸（11891）岐阜
新山まゆみ（11970）広島
朝日　守（12160）埼玉
井上　晋（12540）福岡
田島　守（12628）信濃
木原　清（12674）石川
山口恭生（12732）神奈川
松永義夫（12828）静岡
児玉式雄（128891）東京多摩
吉野勝夫（13044）北海道
小山　貢（131169）京都・滋賀

関本澄子（13208）岐阜
中田憲男（13264）
石崎義昭（13296）岐阜
近藤正吉（13349）
村松　充（13425）
兼光　功（13467）北九州
松田好子（13612）
長谷川敦子（13633）
堅田政孝（13799）北海道
吉岡千津子（13812）北九州
藤川美久子（13828）北九州
鈴木正典（13830）東海
平賀武雄（14044）広島
服部堅一（14211）
濱村　信（14217）
加藤ちづ子（14319）東海

寄付金及び助成金などの受入報告
（平成30年3月31日まで）

寄付者など	受入金額など（単位千円）	寄付の目的、その他
澤村 眞治 会員	20	有志からのご寄付のお願いに対する永年会員からのご寄付
京王電鉄株式会社	1,000	高尾の森づくり活動支援

上田定利（14412）広島
大野能敬（14528）広島
田中朝子（14558）熊本
小田里子（14592）広島
加藤義弘（14748）岐阜
三村洋子（14842）広島
沓内博子（14921）広島
世戸登見子（14926）広島
山口晴美（15102）広島
峰島要二（15184）埼玉
児嶋眞平（15194）福井
長岡光恵（15220）東海
土田大助（15316）広島
小野サツキ（15344）福岡
児玉かめ子（15347）福岡
難波和夫（15476）広島
福川　渉（15507）広島
八木佳苗（15562）東京多摩
髙野啓一（15605）静岡
岡島朋子（15916）東海
三輪　力（15948）信濃
叶谷寿一（15978）千葉
灰田郁夫（15980）広島
植木康一郎（16043）神奈川
山本麻帆（A0071）

正会員に移行

鴇田正俊（A0008）岩手
佐藤真弓（A0023）越後
峠原直実（A0035）
松尾みどり（A0072）

◆新入会員のための企画
「徳本峠越えとウェストン祭」

山研委員会

ウォルター・ウェストンの足跡をたどり、新緑の島々谷から残雪の徳本峠を越えて上高地に入ります。上高地では山研に1泊して、翌日「碑前祭」に参加。新会員の仲間づくりを手助けする企画です。

日程　6月2日㈯～6月3日㈰
費用　1万2000円（1泊2食、午餐会会費、記念品代、傷害保険料）
定員　20名（29年度入会の会員および本会会員の希望者）
申込み　5月12日㈯までに　柴山信夫まで。
TEL 090-8331-4212
jac-sanken@jac.or.jp
＊現地集合・解散

山研ＦＡＸ番号変更のお知らせ

経費削減の一環として、現在ＦＡＸで使用している番号を5月末で廃止し、6月1日より電話番号と共用にいたします。ご迷惑をお掛けしますが、登録の変更をお願いいたします。

電話・ＦＡＸ共通＝0263-95-2533

◆第72回ウェストン祭のご案内

信濃支部ウェストン祭実行委員会

本年も恒例のウェストン祭（碑前祭）を6月3日（第1日曜）に開催します。ウェストン広場にて午前10時から。記念講演は、山岳ジャーナリスト・菊地俊朗氏。前日2日㈯は恒例の徳本峠記念山行を行ないます。島々宿出発6時、記念山行は自己責任が基本です。多くのご参加をお待ちしております。

◆三ッ峠山アツモリソウ保護活動と植物観察

自然保護委員会／東京多摩支部自然保護委員会

三ッ峠山アツモリソウの保護活動（主に除草）と植物観察を三ツ峠山荘のご主人の指導で行ないます。

期日　6月17日㈰・18日㈪（1泊2日）

場所　三ッ峠山周辺

集合　河口湖駅前バス乗り場9時30分

日程　17日㈰　河口湖駅＝路線バス＝三ッ峠山登山口～三ッ峠山荘（昼食）～アツモリソウ保護活動、植物観察（3時間ほど）～三ッ峠山荘（泊）

18日㈪　三ッ峠山荘～三ッ峠山（開運山）～三ッ峠山荘（朝食）～下山〈2コースを設定し、希望コースで下山予定〉。

申込み締切　6月10日㈰

申込み先　東京多摩支部　岡義雄

TEL 090-2140-5057

または✉okayoshia@ozzio.jp

＊申込み者には後日、詳細をご連絡いたします。

◆2018年度自然保護全国集会「白山をめぐる動植物の現状と今後」

自然保護委員会（石川支部共催）

日時　7月8日㈰～9日㈪

場所　石川県能美市辰口町「まつさき」

日程　8日＝集会（委員会報告、支部活動報告、基調講演、分科会、懇親会）

9日＝フィールドスタディ（白山高山植物園）

費用　1万5000円（フィールドスタディのバス代などは別途必要）

申込み　5月31日までに9日の参加有無を明記し、ハガキ、Fax、メールなどでお申込みください。〒274－0063　船橋市習志野台4－43－1－102　川口章子

TEL 047-463-8721

✉syuaki@pony.ocn.ne.jp

＊申込み者に詳細を送ります。

◆全国「山の日」フォーラム6月に秋葉原UDXで開催

第3回となる全国「山の日」フォーラムが6月9日と10日の両日、東京・秋葉原駅に隣接するアキバ・スクエアで開催される。全国山の日協議会、環境省、林野庁、文部科学省、スポーツ庁などで構成する実行委員会が主催するもので、祝日「山の日」が施行された3年前から都内で開催されている。

今年のシンポジウムやトークショーのテーマは《たくましい子どもたちの育成、地域の活性化、安全登山の啓発活動》など。

このうち10日午前の「登山の安全と山岳救助」のテーマでは、長野県警察航空隊隊長の宮崎茂男氏（遭難救助の現場から）や国際山岳ガイドの近藤謙司氏（登山での自己責任と危機管理能力について）などの講演が予定されている。入場無料。詳しくはwww.yamanohi.netで。

◆山岳写真展「心に映る山々」

アルパインフォトクラブ

国内外で撮影の2017年作品40点を各地で巡回展示します。ぜひお立ち寄りください。

巡回　伯耆の国展
会期　4月7日㈯～5月13日㈰
会場　伯耆国山岳美術館　鳥取県西伯郡伯耆町金屋谷
TEL 0859-63-0396

巡回　酒田展
会期　6月20日㈬～26日㈫
会場　酒田市総合文化センター
TEL 0234-24-2991

巡回　長野展
会期　9月1日㈯～29日㈯・日曜休館
会場　長野市大門柏与文具2F「柏与フォトサロン大門」
TEL 026-232-7609

巡回　東京・高尾山展
会期　10月6日㈯～8日㈪
会場　東京都「TAKAO599 MUSEUM」
TEL 042-665-6688

なお、第26回（2018）山岳写真展を左記のとおり開催します。
会期　12月13日㈭～19日㈬（10時・土日11時～18時、最終日15時まで）
会場　東京四ツ谷日本写真会館「ポートレートギャラリー」
TEL 03-3351-3002
問合せ　川嶋新太郎
TEL 03-3873-0907

◆第60回山松会・夏山相談所開催《アルパインフォトクラブ写真展も併催》

昭和33年7月に上野松坂屋会場で第1回夏山相談所が開催され、平成23年からは石井スポーツ主催「山小屋サミット」と併催して60周年という節目の開催となる。

北海道から南アルプスまで、全国から山を熟知した相談員が集まり、対面式で登山の相談ができる。当会アルパインフォトクラブ会員の写真展と石井スポーツ即売会も同じ会場で開催される。（入場無料）

期間　5月11日㈮13時～19時　5月12日㈯10時～17時
場所　有楽町駅前・交通会館12階

◆企画展、ワークショップの年間予定

安曇野山岳美術館

《企画展》

中嶋大道　昆虫素描展
3月16日㈮～4月18日㈬
熊谷樫　山の絵本の原画展
4月20日㈮～6月13日㈬
開館35周年記念　足立源一郎展
6月15日㈮～10月17日㈬
開館35周年記念　畦地梅太郎展
6月15日㈮～10月17日㈬
山への賛歌　武井清展
10月19日㈮～11月28日㈬
地元作家展
11月30日㈮～12月10日㈪

《ワークショップ予定》

5月5日　小学生対象ワークショップと絵本の読み聞かせ
8月11日　山の日イベント（調整中）
8月　小学生対象ワークショップ
8月　ナイトミュージアム・コンサート（信大オーケストラ・メンバーによる四重奏）
9月　上高地写生スクール
10月　一般対象ワークショップ
11月　安曇野スタール・ワークショップ（山のぬり絵体験）
12月　一般対象ワークショップ
12月8、9日　感謝祭

❖編集後記❖

●3月下旬は西伊豆で、伊豆山稜線歩道の風早峠―達磨山―金冠山を歩いてきました。ゴールの金冠山からは雲一つない快晴の下、数日前の降雪で真っ白に雪化粧した富士山が紺碧の駿河湾越しに、それはそれは見事な眺めでした。

●歩道沿いではアセビ（アシビ）の花も見頃でした。「馬酔木」と書くように、馬が食べると中毒を起こし、酔ったようになることからその名があるそうです。奈良公園のアセビも有名ですが、やはり鹿が食べないのでアセビのトンネルとなっている「ささやきの小径（こみち）」という散歩道があり、カップルに人気です。万葉集にも「わが背子にわが恋ふらくは奥山のあしびの花の今盛りなり（詠み人知らず）」とあります。

（節田重節）

日本山岳会会報　山　875号

2018年（平成30年）4月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261-4433
FAX　東京(03)3261-4441
発行者　日本山岳会会長　小林政志
編集人　節田重節
E-メール：jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社